安波茶地区から首里方面を見渡す米兵 /1945 年 5 月

浦添城跡で戦死した仲間を運ぶ兵士/1945年4月22日

浦添国民学校（現・浦添小学校）/1945年5月

火炎放射戦車/1945年5月11日

墓の入口を囲む米兵たち/1945年5月

沖縄に続々と上陸する米軍/1945年

写真提供：沖縄県公文書館（米海軍写真資料より）

ぼくたちの戦争の記憶

戦争当時小学生だった5人。それぞれの壮絶な体験、脳裏に焼き付いた光景、「平和だったら…」と子どもながらに感じていたこと。すべて真実の記憶。「あんな戦争は二度と起こってはならない」平和への願いを込めて語ってもらいました。

「死体が入った棺の中に隠れうじ虫が身体中についていた」

石川 幸助さん（81）
当時9歳

戦火から逃れる途中、母がケガをしてしまい「あなただけでも逃げなさい」と言われ、独り前田小学校近くの遠い親戚のお墓に逃げ隠れました。飲食せず1週間、空腹と喉の渇きで、自分の小便や泥水を飲みました。小便は鼻から抜けるアンモニア臭により吐き気がしました。壕を転々としていた時に、んめぇ（おばあさん）、たんめぇ（おじいさん）と出会いがありました。

動けない2人のためにきゅうすで泥水を汲んで持っていくととても喜んでくれました。出会ってから1週間の内に2人とも亡くなり、しばらく経つとうじ虫や銀バエが湧いていました。

「私が死んだら顔に私の着物をかぶせてほしい」と、生前んめぇと交わした約束を果たすため、私は着物をかぶせようとしましたが、何かに引っかかりかぶせることができず、約束を果たせなかったのが今でも心残りです。その場を後にして他に隠れる壕を探しました。前田部落を作った方の墓に行き着きました。中は骨壺と死体が入った棺でぎっしり。入り口からちょっと入ったところに座って「平和だったら、青々と生い茂った草木を刈って、ウサギやヤギにエサやりができたのになー」と思いつつ外を眺めていました。その時、「ヒューイ！」という口笛が鳴ったのを聞いて、「アメリカ兵に見つかってしまった！」と思い、急いで死体が入った棺の中に入っておじいさんの上にかぶさるようにして隠れました。死体のあばら骨がつぶれる音がしました。見つかってしまっては殺されると息を潜めて隠れていましたが、銃剣でふたをを開けられ引っ張り出されてしまいました。棺から出た時には体がじめっとしていました。着物の切れ端やらうじ虫やらが体中に付いていたのを払いました。その様子を見たアメリカ兵もかわいそうだねーと思ったのかもしれないですね。ポケットからチョコレートを出し自分が食べているところを見せて、私に手渡しました。それを見た私は安心してチョコレートを食べました。水も飲ませてもらいました。おいしくて仕方ありませんでした。その後は捕虜となり、死んだと思っていた母とも収容所で再会でき、戦後2人で必死に生きてきました。

「長男としての役目を果たすその思いだけでした」

石川 仁助さん（85）
当時13歳

私は学童疎開のため那覇の上江洲旅館というところで待機しながら、痩せこけて足を患っていた母のことを想い、「長男として母をお墓に入れられないと一生の悔やみだから疎開はしない」と引率の先生に断りを入れました。先生からは「疎開しなければ死ぬかもしれないよ」と言われましたが私の決意は変わりませんでした。見送りに来た父親と一緒に浦添に帰って来ました。「仁助が残ったのは祖先からのお告げであり、仁助の役目なんだ」と祖父が言っていましたが、その言葉どおりになりました。

父を含めて兄弟3人、戦争に召集され私が中心となり家畜などにエサやりをしたりと生活を支えなければならなくなりました。

1945年4月1日に北谷から読谷にかけてアメリカ軍が上陸したのは知っての通り。私は前田小学校近くの壕に隠れていました。南進して来た米軍が浦添に入って来て、緑豊かだった浦添は戦車の火炎放射によって焼き払われ、朝まで青々とした風景が一日の内に焦げと化しました。「ここに残っていたら死んでしまう」と家族で命からがら南風原まで逃げました。

家族6人の命を奪った戦争は思い出すのも辛い記憶ですが、二度と戦争を起こさないために体験を読んで平和のことを考えてもらえればと思います。

「不運にも私だけ手榴弾の破片が足に当たってしまいました」

比嘉 大造さん（82）
当時10歳

1944年、日本兵が学校にやってきました。手榴弾の実演を体験させるということで4クラスの生徒が学校に呼び出しされました。3回実演があって、1回目の時にその破片が足に当たってケガをしました。温かさを感じ、足を触ったら血が出ていたんです。不思議なことに痛くなかったので黙っていたのですが、実演が終わった時に先生にケガしたことを話すと、日本兵が私を抱っこして病院まで連れて行ったのをお覚えています。その件があって「沖縄に居たら大変だ」と親がすぐに疎開手続きをして疎開することになりました。疎開船3隻の内の1隻は対馬丸で、私は別の船から対馬丸が炎上して沈没するのを見ました。とてもひどい光景でした。

「家族みんなで故郷での死を覚悟しました」

親富祖 正市さん（80）
当時8歳

防空壕に隠れていた時に、いよいよ戦いが激しくなって「この辺は危ないから逃げたほうがいい」という情報が入ってきて、首里に逃げました。そこからまた糸満市名城まで逃げ、もっと南下しようと思いましたが、バックナー中将が殺られたことにより、アメリカ兵が無差別に人を殺しているという情報を聞き、途中一緒になった家族と「どうせ死ぬなら自分たちの部落に帰って死にましょう」と引き返した途中で捕虜となりました。

捕虜収容所では、食事などの配給があり生きることができました。夜な夜な日本兵が出てきて、配給された食料を奪っていくということもあったようです。

「爆弾により目の前で母を亡くしました」

親富祖 清武さん（84）
当時12歳

私には家族が9人いたのですが、母も含めてみんな戦争で亡くなり、私は戦争孤児として生きてきました。

昭和20年3月23日、小学校6年生の卒業式の日でした。空襲の合図であるサイレンが鳴ったと思うと飛行機のごう音が聞こえ、「解散！」の合図で一斉に自宅へと帰りました。防空壕に隠れながら朝は早く起き芋ほり、それが終わったら豚の世話をする毎日が続きました。4月2日、様子を伺いながら豚の世話をするなどし仕事を終えた後に母と家に行きました。母は台所で大きな鍋のすす払いをし、私はそのすぐ近くで母の仕事が終わるのを待っていました。その時、家の近くに爆弾が落ちたようで「ボン！」と大きな音がした瞬間に、母が釜と鍋の間に頭を突っ込んだ状態になりました。急いで駆け寄り母を起こそうとした時、頭から血を流しているのが分かりました。爆弾の破片が当たったようで即死でしたね。助けを求めましたが周りの人も逃げるのに精一杯。助けることができませんでした。